

主体的に学ぶ子どもの育成
—学ぶ意欲を育む授業づくりを通して—

鹿島市立古枝小学校 校長 森山 宗治
研究代表 教諭 渡邊 陽子

1 主題設定の趣旨

近年日本を襲った自然災害は、日本の社会に、人の心に多大な影響を及ぼした。また、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく変化している。社会では、誰かの価値観や論理で評価され動くのではなく、自分の頭で考え、自分で行動し、結果を出せる人材、国際社会でも交渉力のある人材が求められている。平成26年に中央教育審議会より出された「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」でも、「『何を教えるか』という知識の質や量の改善はもちろんのこと、『どのように学ぶか』という学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります⁽¹⁾と示してある。混沌とした時代だからこそ、問題に直面した時、経験を生かして解決策を考えたり、仲間と支え合い新しい考えを生み出したり、自分の役割を果たすことで喜びや自信を得たりしながら、たくましく生きることのできる力を子供たちに付けることが求められている。

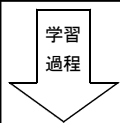
人が生きていくことは、学びの連続である。学校を卒業後も、家庭や職場、社会において、変化する世の中に適応したり、自分の人生を生き甲斐のあるものにししたりするために、自分にふさわしい方法を選択して学んでいく力を付けることが大切となる。学びは個人のためだけでなく、よりよい社会の形成につながる。試行錯誤が思い切りできる今こそ、学び方を学ぶことが、生涯にわたり学習していこうとする姿勢につながると考える。

これまで、本校の子供は、学ぶ意欲が低く自主性が育っていないという実態があった。授業実践が子供の主体性へとはなかなか結びついていないという課題から、授業づくりについて根本的に見直したいという思いをもった。そこで、平成25年度より、主体的に学ぶ子供の姿を目指し研究に取り組んできた。平成25年度は、授業実践や全体研修会を通し、主体的な学びの姿を鮮明にし、目指す子供の姿について共通理解を図った。平成26年度は、子供は自ら学ぼうとする存在であり、教師は子供の学びを引き出し、支える存在であることを心に留めながら、魅力的な単元を設定し授業実践をした。2年間の授業実践により、主体的な学びを引き出す工夫点が徐々に明らかになってきた。平成27年度は、更に各学年において、目指したい子供の学びを明確にし、授業づくりと学びの基盤づくりに取り組むこととした。

2 研究主題の考え方

本校では、主体的な学びを以下の表1のように捉える。子供のどの発達段階においても、知識や技能の習得の場、活用問題や発展的な問題に向かう場、どの教科・領域でも主体的な学びを押し進めていくことができると考えている。

表1 「主体的な学び」とは ～本校の捉え方～

	<ul style="list-style-type: none"> ◇問題を見付け、自分のめあてをもつ ◇問題の解決のため、見通しをもち、学習計画を立てる ◇見通しや計画に沿って、今もっている力を存分に発揮して実践する ◇活動を振り返り、次への展望をもつ
---	--

また、子供は、根本的に学ぶ意欲があり、教師が適切な指導、支援を行うことで主体的な学びが促進され、それが生きる力につながっていくと考える。その際、大事になるのが、教師の立ち位置である。教師は教える人、子供は教えられる人という固定的な上下関係から脱却し、子供が学びの主体であることを認識しなければならない。教師は、子供をよく観察、理解し、適切に支え、主体的な学びを引き出す必要がある。

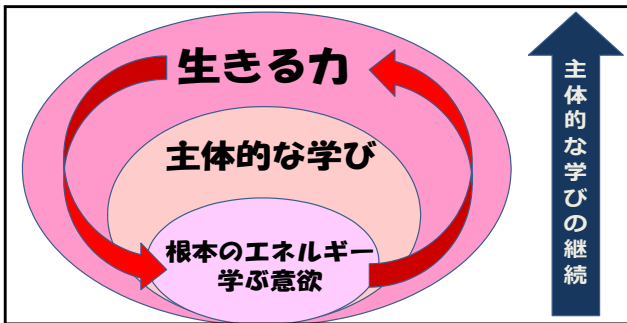


図1 子供たちの学び

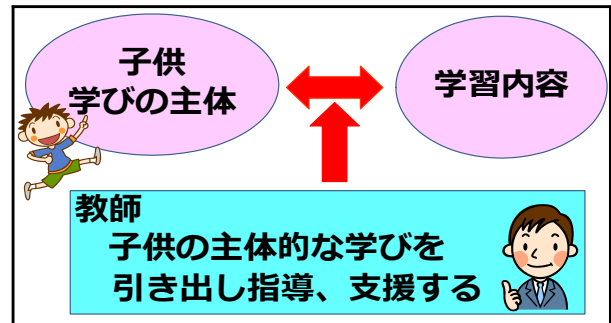


図2 教師の立ち位置

「学ぶ意欲」については、栃木県総合教育センターによる学ぶ意欲を育むための調査研究を参考に、以下の表2のように捉える。子供が主体的に学んでいるときの心の働きが、「学ぶ意欲」だといえる。なお、平成27年度1学期に栃木県総合教育センターの調査研究に基づいた「学ぶ意欲を把握するアンケート」を実施した結果、全校的に有能感が低いことが課題となった。

表2 「学ぶ意欲」とは ～本校の捉え方～

学習過程	学ぶ意欲
めあてをもつ	○知的好奇心 ……おもしろそう、もっと知りたい ○有能さへの欲求 ……分かってほしい、できるようになりたい ○向社会的欲求 ……実現したい、役に立ちたい
見通しをもち 計画を立て 実践する	○独立達成 ……自分の力でやり遂げよう ○自発学習 ……自分からやってみよう ○共同学習 ……友達と一緒に考えてみよう、やってみよう ○深い思考 ……もっとよく考えてみよう ○情報収集 ……調べてみよう、探してみよう ○挑戦行動 ……少し難しいことにチャレンジしよう
振り返る	○おもしろさ、楽しさ ……おもしろかった、またしたい ○有能感 ……できた、分かった ○充実感 ……実現できた

3 研究の目標

学習意欲をもち、主体的に学ぶ子供を育てる。

4 研究の仮説

目指したい子供の姿を明確にし、主体性を引き出す手立てを取りながら授業づくりを行ったり、学習習慣の確立へ向けた取組や学習環境の整備、互いに支え合う集団形成などの学びの基盤づくりを行ったりすれば、学ぶ意欲をもち、主体的に学ぶ子供を育てることができるだろう。

5 研究の内容と方法

(1) 授業づくり

- ア 目指したい子供の学びの明確化
- イ 主体的な学びを引き出す工夫
- ウ 魅力ある単元の設定と実践
- エ 主体的な学びを引き出す授業の日常化

(2) 学びの基盤づくり

- ア 学習習慣の確立へ向けた取組
- イ 学びたくなる環境の整備
- ウ 安心して学ぶことのできる集団づくり

6 研究の実際

(1) 授業づくり

ア 目指したい子供の学びの明確化

本校で捉える主体的な学びの姿について、子供の発達段階に応じて更に明らかにし、日々意識しながら授業を行いたいと考え、表に整理した(表3)。

表3 各学習過程における目指したい子供の学び

主体的な学びの姿		低学年	中学年	高学年	
学習の準備	学習に対する構えをもつ	<ul style="list-style-type: none"> ・学習用具を準備してから休み時間に入る ・学習の開始時刻を守る ・教科によって自分でできることをする(音読など) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ノートなどから、今までの学びを振り返る ・学習用具を準備し、自分たちでできることを始める(準備運動など) 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習の目標、(めあて)、内容、方法を振り返る ・教科によって、前時とのつながりから本時の学習活動を自分たちで始める 	
めあて	問題を見付け、自分のめあてをもつ	○問題を見付ける	<ul style="list-style-type: none"> ・提示されたことに対して、興味をもつ 	<ul style="list-style-type: none"> ・提示されたことから、学びたいことや学ぶ動機をもつ 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時までの学習や社会的事象などから、学びたいことや学ぶ動機をもつ
		○自分のめあてをもつ	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と一緒にめあてを考える ・みんなのめあてを自分のめあてとして捉える 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師や友達と相談しながらめあてを立てる ・めあてを解決しようという切実感をもつ 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時とのつながりや提示されたことなどから自分でめあてを立てる
見通し・計画	問題の解決のため、見通しをもち、学習の計画を立てる	○見通しをもつ	<ul style="list-style-type: none"> ・既習内容や方法から、解決の糸口を話し合う 	<ul style="list-style-type: none"> ・既習内容や方法から、解決の糸口をつかむ 	<ul style="list-style-type: none"> ・既習内容や方法から、解決方法を考える
		○学習計画を立てる	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と一緒に学習のゴールを決める ・提示された学習の流れが分かる 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と一緒に学習計画を立てる 	<ul style="list-style-type: none"> ・大まかな学習計画を自分たちで相談しながら立てる
実践	見通しや計画に沿って、今もっている力を存分に発揮して活動する	○自力で学ぶ ・調べる ・挑戦する ・考える 等	<ul style="list-style-type: none"> ・今まで学んだことを生かして、自力で解決しようとする ・夢中になって活動する 	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの経験を生かし、 試行錯誤する ・めあてに向かい、あきらめずにやり抜く 	<ul style="list-style-type: none"> ・計画的に活動する ・もっとできることはないか考えたり、新しいことや少し難しいことにも挑戦したりする
		○友達と学ぶ ・交流する ・伝え合う ・話し合う 等	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いや考えを伝える ・友達の考えや表現のよさを見付ける ・分からないことを友達や教師に尋ねる ・尋ねられたことに答える 	<ul style="list-style-type: none"> ・試行錯誤の中で見付けた自分の気付きや解決方法を友達に伝える ・それぞれの考えを比較し、よりよい方法を見付ける 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを筋道を立てて説明する ・相手の意図をつかみながら聞く ・互いの立場や意図をはっきりさせながら話し合う
振り返り	活動を振り返り次への展望をもつ	○めあてに対してまとめる	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と一緒に、キーワードを入れながらまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなでキーワードを確認し、自分の言葉でまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習内容を自分でまとめる
		○学び方を振り返る	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と一緒に、学び方を振り返る ・学習の感想をもつ 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなと一緒に、学び方について振り返る 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習方法(プロセス)を振り返る。 ・誰のどのような考えで学習が進んだか、失敗の理由などが分かる
		○次時への展望をもつ	<ul style="list-style-type: none"> ・次の学習を楽しみにする 	<ul style="list-style-type: none"> ・次の学習へ向け、めあてをもつ 	<ul style="list-style-type: none"> ・次の学習へ向け、めあてや見通しをもつ

イ 主体的な学びを引き出す工夫

子供を主体に考え、子供の学習への動機やプロセスに目を向けるように心掛がけながら授業研究会を重ねた。どの教科とも、共通した手立てとして有効なことが明らかになってきた。子供の学習活動に問題が生じた際、原因を把握し、具体的な指導へと生かせるようになってきた(表4)。

表4 各学習過程における指導の工夫点

A 問題を見付け、自分のめあてをもたせるための工夫	<ul style="list-style-type: none"> a 子供の発達、興味・関心を把握し、解決する価値と魅力のある問題を提示する b 知的好奇心、興味・関心、疑問、驚き、意外性、必要感、切実感から問題意識をもたせる(外発的動機付けではなく内発的動機付けが大切) c 自分の姿を客観的に捉えさせることで、めあてをつかませる d 「つまずき」を「めあて」に生かす e 前時の振り返りをめあてにつなげるようにさせ、思考の連続性を生み出す
B 問題の解決のため、見通しをもち、学習計画を立てさせるための工夫	<ul style="list-style-type: none"> a 既習の学習内容、学習方法の振り返りをさせる b めざす姿や形などを例示することで、実現のための具体的な方策を考えさせたり、「できそうだ」というイメージを抱かせたりする c 学習方法や解決のための具体的な支援策を示し、どの方法で学習するのかを子供に選択させる→自分たちで学習グループやペアを作らせる d 活動計画表を提示したり、作成させたりする e 計画を基に学習する経験を繰り返しさせる f 学習過程をシンプルにし、パターン化させる
C 見通しや計画に沿って、今もっている力を存分に発揮して活動させるための工夫	<ul style="list-style-type: none"> a 試行錯誤の場の設定 b 自力解決を促す教材、教具の工夫 c 教科や単元の特性に応じて、多様な学習活動を取り入れる d 活動時間と活動場所の保障 e 子供の観察、理解→問題があれば、適切な指導、助言、資料提示、情報提供をする f 応用、発展問題の提示 g 互いに学び合う場を設定したり、誰と、どのように行わせるか検討したりする h 子供が安心できる場、支持的風土づくり i 友達(相手)が何をめあてに、どのような方法で学習しているのかを、互いに理解し合おうとさせる j 子供の実態に応じて、学習形態(少人数、習熟別、課題別など)を工夫する k 様々な思考ツール(ウェビングマップや座標軸など)や情報を可視化するための付箋やホワイトボードなどを活用する
D 活動を振り返り、次への展望をもたせるための工夫	<ul style="list-style-type: none"> a 振り返りの時間の確保→時間の確保が難しい際は、日記を活用する b 「めあて」に対しての「まとめ」であることを意識させる c 振り返りの視点の提示(感想、分かったこと、友達のよさ、困ったこと 等) d 次時へのつながりを意識化させる e 失敗の理由(解決方法、解決時間、解決のための努力に問題があるのか、めあてが自分に合っていないのか)を考えさせ、めあてや学習計画の見直しをさせる f 伸びやよさを感じ取ることができるような個に応じた肯定的な言葉掛けをする g 学び方について、何がどのようによかったのかを認めたり全体に紹介したりする h 付箋やノートへの書き込みなどで、互いのよい面について相互評価をさせる

また、子供の主体的な学びを引き出す際、教師は、子供にとって重要な人的環境である。一人一人を大切に受け止め、子供を育てていこうとする教師の姿勢を、子供は敏感に感じ取る。そのことは、子供たち同士が安心して学ぶことができる環境づくりにも影響を与える。主体性を育てるために、子供の視点に立ち、どのような言葉掛けをしていけばよいかということをお大切にすることを心掛けた(表5)。

表5 学習状況に応じた言葉掛け

予想外の発言やつまずきが見られるとき	<ul style="list-style-type: none"> ・ どうしてそう思ったの。なるほど、そう考えたんだね。 ・ ~してみようとしていたのね。~という方法もあるよ。 ・ 困っていることはない? ~してみたらどうかな。 など 子供を理解した後、助言や示唆をする
よさが見られるとき	<ul style="list-style-type: none"> ・ ○○を使って考えたんだね。友達にも紹介してね。 ・ この方法でいいよ。自信もって続けてみよう。 ・ ○○さんらしいまとめ方だね。 ・ よく意見を出して話し合っ、よいアイデアが生まれているね。 など 子供のよいところを具体的に褒める

ウ 魅力ある単元の設定と実践

(ア) 魅力ある単元設定の工夫

単元づくりでは、子供にとって意味のある活動を通し、教育的価値が実現されるように努めた。そのために、ゴールを明確にした単元や学習コースを選択することのできる単元、教科横断的な単元ストーリー性のある単元を設定した。それぞれ、目指したい子供の学びと指導の工夫点を明確にしなが、主体的な活動が促進されるよう考慮して実践に取り組んだ（表6）。

表6 授業実践例

ゴールを明確にした単元	2年国語 5年家庭 6年社会	『かくれんぼ』をげきにして1年生やはいくえん生に見せよう 「すてきなマイマスクを作ろう」 「新しい国づくりを進めた人々 ～心惹かれる人物のポスターを作ろう～」
単元を通して、または本時で学習コースを選択することのできる単元	4年理科 5年図工 6年体育	「もののあたたまり方」 自分たちで実験の方法や道具を考え、実験グループを作り、実験を行う。 「旅立つ6年生へ 感謝の気持ちを絵や立体で表そう」 6年生へ伝えたい思いを様々な形に表現する。材料や用具、展示場所（体育館）の特徴を生かしなが、製作計画をもとにグループに分かれ活動を進める。 「水泳」 同じめあての友達とバディを組み、互いに教え合いなが学習を進める。
教科横断的な単元	5年	「アジアの国々を全校のみんなに紹介しよう」 総合…オイスカの方との交流を通して、アジアの国々を知る。 音楽…アジアの音楽に触れ、自分たちでリズム作りをし、工夫して表現する。 国語…伝えたい内容や目的に合わせて、効果的な発表方法を工夫する。
ストーリー性のある単元	1年算数	「おおきさくらべ ～秘密戦隊くらべんジャー～」 くらべんジャーからの悩みを解決するために自分たちのめあてをつかみ、グループで協力しなが一つ一つ問題を解決していく。

(イ) 学習コースを選択することのできる単元での授業実践例

- a 単元名 もののあたたまり方（4年理科）全8時間 本時5／8 平成27年10月21日実践
- b ねらい 熱源と温まり方を関係づけて考え、もの（金属・水・空気）によって、温まり方に違いがあることを捉えることができるようにする。
- c 目指したい子供の学びと指導について（表7）



表7 本単元における「目指したい子供の学びと指導の工夫点」

	中学年で目指す姿	本単元で目指す姿	本単元における手立て ☆本時の関連項目 表4との関連
めあて	<ul style="list-style-type: none"> 提示されたことから、学びたいことや学ぶ動機をもつ 教師や友達と相談しながらめあてを立てる めあてを解決しようという切実感をもつ 	<ul style="list-style-type: none"> 熱源から生じた熱が、どのように伝わり、温まっていくのかを知りたいという願いをもつ 全体で話し合いなが、問題を創出しめあてを立てる 	<ul style="list-style-type: none"> ○単元の導入で金属や水、空気を温める体験活動を行う。(A-a) ☆話し合いの中で、子供たちが問題を創出できるような、事象提示を行う。(A-b) ☆創出した本時の問題から、自分たちの言葉でめあてを立てさせる。(A-b)
見通し・計画	<ul style="list-style-type: none"> 既習内容や方法から、解決の糸口をつかむ 教師と一緒に学習計画を立てる 	<ul style="list-style-type: none"> 前単元を思い出し、単元の大まかな学習計画を話し合って考える 実験する方法を考えたり、選んだりする 問題に対する、自分なりの予想をもつ 考えた実験や、予想に応じて、自分たちで班を作る（学習コースの選択） 	<ul style="list-style-type: none"> ○前単元「ものの温度と体積」を振り返らせ、大まかな学習計画を考えさせる。(B-a) ☆課題解決のための実験を考えさせたり、これまでの学習の中で使ってきた実験道具の図を確認しながら、自分たちで実験道具を準備できるようにさせる。(B-b) ☆考えた実験を基に、問題に対する予想を必ず書かせる。(B-b) ☆実験や予想に応じて、班の数や人数を指定し、自分たちで班を作らせる。(B-c)

	中学年で目指す姿	本単元で目指す姿	本単元における手立て（☆ 本時の関連項目）
実践	<ul style="list-style-type: none"> ・今までの経験を生かし、試行錯誤する ・めあてに向かいあきらめずにやり抜く ・試行錯誤の中で見付けた自分の気づきや解決方法を友達に伝える ・それぞれの考えを比較し、よりよい方法を見つける 	<ul style="list-style-type: none"> ・実験の道具を自分たちで準備する ・安全に、協力して実験を行い、記録する ・実験がうまく進まなかった場合は、自分たちの実験を検討する ・実験結果を基に、班で考察を始める ・実験結果と結果から考えられることを発表する 	<ul style="list-style-type: none"> ☆実験道具は自分たちで準備できるように、環境を整え、数も確認しておく。(C-d) ☆実験の注意事項は、その都度カードに書き、黒板横にストックしておく。(C-d) ☆記録はノートと動画で行い、結果を共有する場を設定する。(C-c) ☆実験がうまく進まなかった班には、自分たちのやり方を検討するように促す。(C-e) ☆結果が出たら、班で、結果から考えられることをまとめ、発表者を決めさせておく。(C-g) ☆考察を行うときには、図やモデルを使って考えさせる。(C-k)
振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなでキーワードを確認し、自分の言葉でまとめる ・みんなと一緒に学びについて振り返る 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の言葉でまとめを書く ・本時の学習の感想を話す ・学習計画を基に、次時の学習の展望をもつ 	<ul style="list-style-type: none"> ☆自分たちで課題や実験を考え、結果、考察まで導いたことを振り返らせる。(D-b) ☆授業の終わりには、学習計画を基に、次時の展望をもたせる。(D-c)

d 本時の授業の実際

主体的な学びを引き出す手立てを基に、水の温まり方の特徴を捉える第5時の授業を行った。

	学習活動 (子供の反応)	教師の指導・支援 (☆主体的な学びを引き出す工夫：◆評価)
めあて	1 前時の振り返りをする。 2 本時の学習問題を設定し、めあてを立てる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> ・水がゆらめいてる！ ・なんだか下から上に行ってるよ！ </div>	○示温テープを使った実験を思い出させ、水が上から温まったことを確認させる。 ○下を温めたのにどうして上から温まったのだろうかと投げかける。 ☆ビーカーで水を温めシュリーレン現象を見せる。水の動きを予想させ、学習問題を創出させる。 <div style="text-align: right; margin-top: 10px;">  </div>
見通し 計画	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px; text-align: center;"> 温められた水はどう動くのか調べよう </div> 3 実験方法を考える。 <ul style="list-style-type: none"> ・ものを入れる ・水に色をつける ・示温テープを使う ・温度計で測る 	☆自分たちで実験方法と実験道具を考えさせる。 ○うまく考えが出せない場合、時間を掛けずに教師から提示し、実験方法と安全上気を付けることを確認する。 ☆削り節の他に、味噌や茶葉、コーヒーがら等を用意しておき、各自に選択させる。選択したものにより、4名から5名のグループを自分たちで作らせ、実験道具も準備させる。 ○入れるものの動きが、水の動きであることを再度押さえる。 ○机上整理をさせ安全に留意するとともに、動きが見られたら火を止め、加熱しすぎないことを確認して実験に入る。 <div style="text-align: right; margin-top: 10px;">  </div>

資料1 シュリーレン現象を見せる

資料2 実験カードの提示

実践

4 実験をする。



資料3 役割分担し、実験を行う

- ・みその粒が動き出した!
- ・水が回ってるみたい!
- ・一気に上に上がったよ!

5 結果を出し合う。

- ①自分たちの行った実験
- ②実験の結果
- ③結果から考えられること

- ・みんな上に動いているね!
- ・動きは同じだね!

6 結果を基に、水の温まり方を考察し、本時のまとめをする。

- ・上に動いて空いたところに冷たい水が下りてくるんじゃないかな?

振り返り

7 本時の学習を振り返る。

8 次時への展望をもつ。

☆実験の様子を自分たちでタブレットで記録させるとともに、水の動きをグループでまとめさせる。

○ビーカーの中の様子を、ノートに図示して記録させる。

◆水の温まり方の特徴を、削り節の動きを基に考察し、記述している。【思考・表現】(発言・ノート)

☆いくつかのグループから、動画を見せながら発表させる。



資料4 黒板に実験結果を書く 資料5 撮影した動画をIWBを使って発表

○「上に上がる」「動く」というキーワードを確認し、結果をまとめさせる。

○モデル図を使い、温められた水が上に上がった分、そこに冷たい水が下りてくるということを結果から考察させ、本時のまとめをする。

◆水は、熱せられた部分が移動して全体が温まることを理解し、記述している。【知識・理解】(ノート)

☆自分たちで課題や実験を考え、結果、考察まで導いたことを褒める。また、実験がうまく進まなかった場合は、どこに問題があったのかを考えさせる。

☆次時は、単元計画を基に空気の温まり方を調べることを確認し、次時への期待感をもたせる。

e 主体的な学びを引き出す授業づくりについての考察

本単元で目指したい子供の学びの姿を明確にし、手立ての工夫を行ったため、主体的な学びを引き出すことができた。事象提示により興味・関心を喚起された子供たちは、したい実験を自ら選択し、スムーズにグループを構成することができていた。準備、実験、観察、記録、考察、発表も互いに相談しながら協力して行うことができていた。実験の記録は、ノートとタブレット、発表は、黒板とIWBを使用した。どの班も、役割分担をしながら「①行った実験、②実験の結果、③結果から考えられること」を発表することができていた。自分たちの力で学習を推し進めることができたことを、子供自身も実感していたようだった。また、「次は空気のことを調べたい」と次時への展望をもち、発言することもできていた。

「学ぶ意欲を把握するアンケート」からうかがえる子供の実態として、1学期は、「友達から頼られているし、自分は勉強ができるという有能感をもっている」と答えた子供は、30%とかなり低かったが、単元後には45%と増えた。協力して活動する経験を重ねていくことが、自己有用感を育み、主体的に学ぶ子供の育成へとつながると考えられる。

エ 主体的な学びを引き出す授業の日常化

研究授業だけでなく、日常の授業で子供たちの主体性を育てていきたい。そのために、p. 4の表4「各学習過程における指導の工夫点」を更に具体化し、以下のことに取り組んだ。

(ア) 学習の流れの定着

どの授業においても、「めあてをもつ→見通し計画を立てる→実践する→振り返る」という学習過程に基づいた授業を進めることで、教師と子供と学習過程の共有ができるようにした。この流れは、一単位時間の流れであるが、単元の流れも同様である。特に、振り返りでは、どんな言葉を使ってどのようにまとめを書かせるのか、学習内容だけでなく学び方をどう振り返らせ「できた」「分かった」という有能感を実感させるのかを意識するようにした。

(イ) 子供の活動時間の確保

子供中心の授業としていくためには、何より子供の活動時間を十分に確保することが必要である。そのために以下のことに留意してきた。

a 教師の説明を短くする

- ・子供に分かりやすい話し方をする。
- ・学習の流れを用紙やホワイトボード、黒板等に提示する。
- ・子供の興味・関心を喚起する教材提示を工夫する。
- ・子供の思考の流れに沿ったワークシートやヒントカードを準備する。
- ・子供に理解させたいことは、子供自身に説明をさせる。
- ・全体での指導が行き届かない子供には、個別で対応する。

b 多様な学習活動を設定する

教科や単元の特性、子供の実態等により、様々な言語活動や体験活動、表現活動等を設定し、子供自身が真剣に学ぶことができるようにした。

c 交流活動の場を工夫する（資料6）

子供たちが、互いに交流し、思考を深めたり考えを発信したりすることができるように、ペアやグループ、全体での相談や説明、発表、話し合い、意見交換等の機会を多くもつようにした。

d 情報の可視化、操作化（資料7）

話し合いや交流の場において、音声での交流だけでなく、情報を目に見える形にすることで、話し合いや交流に参加しやすくした。また、カードやホワイトボード、付箋等を使うことで、自由に書き込んだり、書き直したり、自由に動かしたりすることができ、考えを修正していくこともできる。情報の可視化、操作化により、全員参加の学習につながった。

(ウ) 子供による学習の進行（資料8）

体育でのルール確認や振り返り、社会での調べ学習後の発表会など、授業の中で子供自身が進行できる部分は、思い切って子供たちに任せた。また、グループ活動も様々な場で設定し、互いに協力し、折り合いをつけながら学習を進めていくことを繰り返し経験させた。学習は自分たちのものであるという意識を育てることにつながった。



資料6 社会でのポスターセッション



資料7 ホワイトボードの活用



資料8 体育での振り返りの場

(2) 学びの基盤づくり

主体的な学びを推し進めるための基盤づくりとして、以下の3点に取り組んだ。

ア 学習習慣の確立へ向けた取組

学習規律の定着として、まずは、筆箱の中に入れておく物と机の上の教科書等の原則的な配置の仕方を示し、学習の構えをもたせるようにした。また、「ちがいをおそれず、思い切って挑戦しよう」という学校全体の学習スローガンのもと、各学級で自分たちのスローガンを決定させ、学期ごとに振り返りをしながら学習への意識を継続させた。効果的な学習ノートのとり方も示し、定期的に「学習ノート展」を開くことで、子供たちは、ノート作りに意欲的に励むようになった。

家庭との連携として、年度当初に「家庭学習の手引き」を配布したり、月初めに「生活カレンダー」で自分の生活習慣を見直させたりすることで、家庭での望ましい学習習慣の定着を目指した。また、「学んだことを自分のものにしよう」という学校全体の家庭学習のスローガンのもと、各学級で自分たちの学習スローガンを決定させ、学期ごとに振り返りをしながら、家庭学習への意識を継続させた。「自学ノート展」も開くことで、自分のための学習をしようとする姿が見られるようになり、家庭学習の充実へとつながった。

読書活動の推奨として、年度当初のオリエンテーションで各自の目標冊数を決めさせ、一人100冊運動（読書マラソン）に取り組ませた。平成27年度は97%の子供が100冊、52%の子供が200冊を達成することができた。読書の質的な向上も目指し、教科書に紹介してある本を中心とした「おすすめの本35冊」や、テーマや作者に着目しながら読書の幅を広げることができるような「25冊＋1冊にチャレンジ」、朝の読書タイム、ボランティアによるお話会、教師によるブックステーション、家族とのファミリー読書等、様々な取り組みをすることで、本に親しませることができた。

簡単に諦めずによく考えようとしたり、難しい問題へも挑戦したりするように、国語科と算数科において、朝の時間や家庭学習で活用問題への取り組む機会を設けた。最初は、戸惑う子供も多かったが、継続していくことで次第に合格を目指し、粘り強く問題に向かう子供が増えてきた。

イ 学びたくなる環境の整備

学習の成果を実感させるために、学びの足跡として、絵や作文、新聞、ワークシート、俳句・短歌など様々な学習の成果物を掲示した。掲示された子供にとっては、自信と次への意欲につながった。互いの学びを知るよい機会にもなった。

知的好奇心に働き掛けるために、学習内容が生活の中に活用されていることを紹介する「身近な算数」を、学年編（最近学習した内容）と地域編（地域を素材にしたもの）とに分け、定期的に掲示した。また、季節や学校行事に合った詩や歌を「今月の詩」「季節の歌」として掲示した。子供たちは、興味をもって見たり、口ずさんだり、暗唱に挑戦したりしていた。

子供たちの思いを形にするため、委員会、クラブ、縦割り遊び、学校行事のコーナーは、子供たち自身の手で委ねた。高学年の子供たちにとっては、全校に何を知らせるかを考えることで、自分たちでよりよい学校生活を築こうとする意識が高まってきた。

ウ 安心して学ぶことのできる集団づくり

「Q-U」検査を実施し、検査の結果から学級の課題を分析し、目指したい学級集団の姿へ向け具体的な取り組みを行った。よりよい人間関係や集団について、子供自身が考える場を設けることで、互いを思いやる姿が見られるようになってきた。

また、学級の自治力の向上のため、朝の会、帰りの会の充実を図った。学習と同様に、学校生活も、朝の会で一日のめあてや見通しをもち、一日生活をしたことを帰りの会で振り返るというサイクルを継続することで、自分たちで生活をよりよくしていく姿が見られるようになってきた。

7 研究のまとめ

(1) 研究の成果

- 授業実践や全体研修会を重ねることで目指す子供の学びを明確にし、全職員が様々な教育活動の場で、「主体性を引き出す」という同じ姿勢で子供に接することができるようになった。
- 主体的な学びを引き出す手立てが明らかになり、目指す授業をイメージすることができるようになった。子供にとって意味のある活動を通し、教育的価値が実現されるような単元づくりを工夫したり、主体性を育むための日々の小さな積み重ねを大事に授業に臨んだりするようになった。そのため、子供たちに、自分のめあてをもち、計画に沿って実践し、振り返るという学習のスタイルをほぼ身に付けさせることができた。
- 主体的な学びを支える学びの基盤づくりについて、学習環境の確立、環境の整備、集団づくりへ向けての取組について共通理解をし、実践を重ねることができた。学習生活全体で主体的な学びを推し進める環境が整ってきた。
- 学ぶ意欲を把握するアンケートの集計結果をみると、1回目（平成27年7月実施）より2回目（平成28年2月実施）の値が全ての項目で上がっている。取組の結果、子供たちの学ぶ意欲が高まったといえる。

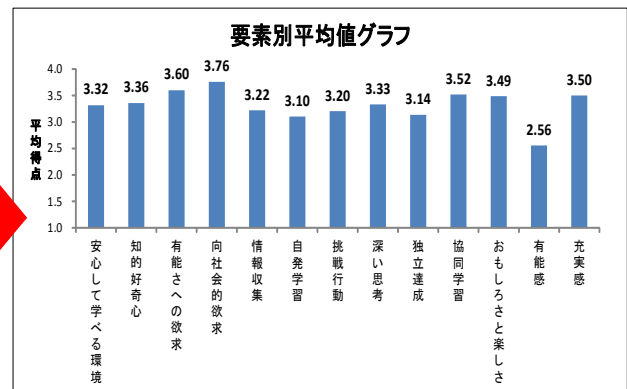
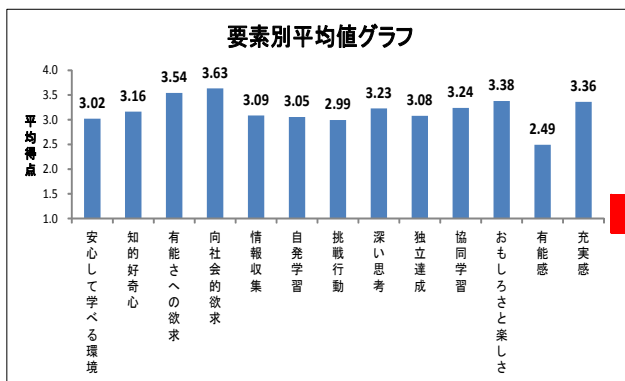


図3 学ぶ意欲を把握するアンケート（平成27年7月実施）

図4 学ぶ意欲を把握するアンケート（平成28年2月実施）

(2) 今後の課題

- 「目指したい子供の学び」の系統表は、前年度の子供の様子や教師の思いから作成したものである。固定的なものではなく、子供の実態に応じて、どの段階から目指すか、どこまで目指すかを考える必要がある。
- 主体的な学びを引き出す手立てについては、一つ一つの工夫点が、更に研究の対象になるような事柄が多い。学ぶ意欲を把握するアンケートの結果にも表れているように、振り返りをどのようにさせ子供の有能感を高めるかということや、子供同士の発言がなかなか結びついていかないという実態から、思考ツールをどう工夫し交流を深めるか等は、更に授業改善の必要がある。今後も、教育の根本的な営みとして、子供が本来もっている伸びたいという願いを引き出し、主体的な学びを確立させることを大事にしていきたい。

《引用文献》

- (1) 文部科学省 『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）』
平成26年11月

《参考文献》

- ・ 栃木県総合教育センター 『学ぶ意欲を育む～『学習に関するアンケート』を活用して』
平成23年3月